HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	リサーチ・アシスタント(RA)成果報告書
Citation	研究論集, 22, 217（左）-225（左）
Issue Date	2023-01-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87871
Type	other
File Information	16_rjgshhs_22_p217-225_l.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

リサーチ・アシスタント(RA)成果報告書

文学研究院研究プロジェクト「人文学と社会」について

文学研究院研究プロジェクト「人文学と社会」は，文学院博士後期課程の学生をリサーチ・アシスタントとして採用することにより，学生を経済的に支援し，博士論文の早期提出および内容の充実を図るとともに，学生の研究環境の充実および若手研究者としての研究遂行能力を養成することを目的としています。

文学院には，令和３年度，175 名の博士後期課程の大学院生が在籍し，そのうち７名がリサーチ･アシスタントとして独自のテーマについて研究を進めてきました。その研究テーマ一覧と，１年間の研究成果の概要報告を，『研究論集』の資料として掲載しています。

研究テーマ一覧

令和３年度

氏　　名	研　究　テ　ー　マ	頁
安　田　　将	キケロの政治哲学とその認識論的基礎	219
猪ノ原　次　郎	西田幾多郎の哲学における表現論と行為論の統合：後期哲学の体系的解明に向けて	220
肖　　潔	知人関係における交感発話と日中交感発話の対照研究	221
堅　田　　諒	映画監督ジョン・カサヴェテスの俳優演技と演出理論の研究 ――『フェイシズ』（1968）と『ハズバンズ』（1970）の分析を通じて	222
翁　　康　健	民族の境界線からみる多文化共生社会の創出 ―― 日本とタイにおける華人の民俗宗教を事例としての比較研究 ――	223
酒　井　駿太郎	ライトノベル研究をめぐる分析枠組みの再構築	224
坂　東　　泰	アヘン禁圧運動から見た 20 世紀初頭の中国財政と中央・地方関係に関する歴史学的研究	225

研究成果の概要

研究テーマ	キケロの政治哲学とその認識論的基礎
RA氏名	安田（やすだ）　将（まさる）
専攻・研究室・学年	人文学専攻　哲学倫理学研究室　博士後期課程３年
指導教員氏名	近　藤　智　彦

研究成果の概要

古代ローマの哲学者・政治家キケロの政治哲学と認識論は，それぞれ近年研究がさかんになっている。しかしながらしばしば別個に取り組まれており，また両者の関連性の解明に取り組んだ研究もあるものの，十分に満足のゆくものではない。そこで本研究は，政治哲学と認識論それぞれについてのキケロの本質的な主張を，それらの間の内的な連関を明らかにする仕方で示すことをめざす。

具体的には，第一に，前40年代の哲学的論考を分析対象として，まず，ストア派の確実な規準にもとづく理論と実践に対して，不確実な規準にもとづく理論と実践という別の理想を提示していることが，アカデメイア派の懐疑主義の立場をキケロが支持する理由であると示した。第二に，確実な規準の判定をめざすストア派に対して，アカデメイア派の懐疑主義の立場は問答術の発見的役割を重視する仕方で不確実な規準の判定をすること，そして発見的な判定という考えの根底には理性と言語（あるいは思考と表現）の一体性という理念が存していることを示した。

これらを通じて，理性と言語の本来的一体性がもつ政治哲学的な含意を考察した。その一体性を取り戻すことを通じて，哲学の理論が実践に対してもつ批判的な役割を確保することができ，それにより国家への哲学による貢献がもたらされるとキケロは考えている。こうして，政治哲学の領域において見いだされた知恵や哲学の公共性という思想の基礎に，理性と言語の一体性という理念が存していること，そしてその理念にもとづいて構想される哲学によって理論がもつ実践的な意味が生かされるとキケロと論じた。

研究テーマ	西田幾多郎の哲学における表現論と行為論の統合：後期哲学の体系的解明に向けて
R A 氏 名	猪ノ原（いのはら）　次（じ）　郎（ろう）
専攻・研究室・学年	思想文化学専攻　哲学倫理学研究室　博士後期課程 3 年
指導教員氏名	田　口　　茂

研究成果の概要

本研究の目的は，近代日本を代表する哲学者・西田幾多郎（1870～1945）の後期哲学の理論的核心を解明することであった。具体的には，(1)西田の「表現」の理論と行為論の統合を中心的課題として，(2)その成果を彼の存在論全体（「歴史的世界の存在論」）に拡張し，後期哲学全体に通底する論理を提示することを計画していた。

実際の研究では，(1)のために実践的知識（practical knowledge）に関するより基礎的な解明が必要であることが判明し，その作業の結果，(1)は計画外の観点からの知見を含む予想以上の成果を得ることができ，また現代の哲学的議論との重要な結びつきを発見することができたが，他方(2)に関しては具体的な成果が出る以前の段階にとどまった。

主な成果としては以下の通りである。①実践的知識，つまり行為に本質的に関わる知識についての西田の思想を解明した。西田の行為論は，(a)行為を産出するノウハウやスキル等の実践知の因果性と，(b)行為すること自体によって観察や推論とは別の仕方で得られる自己知（self-knowledge）の種別性，これらの両面を区別しつつ統一的に捉えている。ここには西田も源泉としたドイツ観念論（18 世紀末～19 世紀前半）の自己知論を実践哲学に活用する現代の議論（analytic German Idealism）と共通する発想が見られる。②表現論はこうした行為論・実践知論に，表象の理論を提供することで認識論的実質を与え，かつ記号作用に関する洞察（特に言語の歴史性・社会性）を与えることで「歴史的社会的」な現実に理論を着地させる役割がある。③西田が行為一般を「物を作ること」と規定するときの概念「制作」は，上述の実践知の産出的側面(a)を取り出し，より詳細に彫琢するためのものである。すなわち，完了した行為や行為の産物は自己知(b)をある面では超え出てゆく。これは当初の計画(2)の存在論の解明のための中心的な論点の一つであり，研究を継続中である。

研究テーマ	知人関係における交感発話と日中交感発話の対照研究
R A 氏 名	肖（しょう）　潔（けつ）
専攻・研究室・学年	人文学専攻　言語科学研究室　博士後期課程３年
指導教員氏名	加　藤　重　広

研究成果の概要

研究目的

本研究は，現代日本語における知人関係における交感発話の特徴，日中交感発話の共通点・相違点を明らかにすること。

研究計画

令和３年度は，知人関係会話における交感発話の開始部・中心部・終結部と日中交感発話の対照研究を進めると考える。知人関係における会話開始部の交感発話の特徴を明らかにするために，会話の場面を分類し，交感発話を用いてどのように会話を開始するのかを考察する。また，中心部の交感発話は，疑似交感発話に対し，メタレベルでの研究を進める。交感発話は会話の進行においていかに会話の進捗を調整するのかを考察する。さらに，終結部にある交感発話は会話を終了する機能を持っているのかを考察する。最後，中国語での交感発話を調べたうえで，日本語と中国語の交感発話の使用状況を比較し，両者の特徴を明確にする。

成果

知人関係における交感発話の特徴をよりよく見極めるために，交感発話のテンスとスタイル分化という形態的構造を先に解明する必要があると気づいた。また，知人関係における交感発話において，交感機能を果たす発話要素が種々含まれている。そのうち，談話標識（語用標識）がその一種である。そのため，談話標識によって示された拡張的交感機能も考察した。成果は，主として，①交感発話の慣用表現におけるタの使用制約とスタイル分化，②知人関係における会話開始部の交感発話，③発話の同調現象からみた交感機能 ── 会話分析の立場から ──，④談話標識「なんか」から見た拡張的交感機能 ── 聞き手との相互作用に注目して ── という四つがある。そのうち，ヤーコブソンの言語伝達行動の六要素から考えを発展し，交感発話の慣用表現における「タ」の語用的使用制約の解明。交感発話のスタイル分化における新しいスタイルの出現およびその語用論的特徴の解明。カルペパー＆ホーの「前景・背景」の観点をもって交感機能の前景化と背景化を捉えることも試みた。そのほか，時間の原因もあるため，研究計画における日中交感発話の対照研究は今後の課題としておく。

研究テーマ	**映画監督ジョン・カサヴェテスの俳優演技と演出理論の研究** ――『フェイシズ』（1968）と『ハズバンズ』（1970）の分析を通じて
R A 氏 名	堅田（かたた）　諒（りょう）
専攻・研究室・学年	人文学専攻　映像・現代文化論研究室　博士後期課程 3 年
指導教員氏名	阿　部　嘉　昭

研究成果の概要

本研究の目的は，アメリカの映画監督ジョン・カサヴェテス（1929–89）の二つの作品，『フェイシズ』（*Faces*, 1968）と『ハズバンズ』（*Husbands*, 1970）を，俳優演技と演出理論の観点から分析することで，初期から中期にかけてのカサヴェテス作品の独自性と創作原理を明らかにし，その映画史的価値を解明することであった。

『フェイシズ』の研究では，1970 年に出版されたシナリオ（John Cassavetes, *Faces*, New York: Signet, 1970）の分析をおこなった。本シナリオは，「撮影台本」（Final Version）と「脚本の初稿」（Original Version）とが並んで記載されている書籍である。シナリオの読解によって，脚本の初稿からどのような過程を経て作品が完成されていったかが推測でき，研究成果として，作品の生成過程および脚本と映画の異同を把握することができた。『ハズバンズ』の研究では，作品の制作過程と映画作品における俳優演技の分析をおこなう計画であった。作品の制作過程について，監督カサヴェテスや出演俳優の発言，インタビューなどからその生成過程を部分的に把握することができ，研究成果をあげられた。しかし一方で，映画作品の分析は，糸口は掴めたものの決定的な結論は未だ出せておらず，更なる研究を必要する。以上，未完の部分はあるものの，研究全体から見れば，この時期のカサヴェテス作品の独自性と創作原理の一端を明らかにすることができた。本研究成果は，博士論文の第二章および第三章に組み込む予定である。

研究テーマ	**民族の境界線からみる多文化共生社会の創出** ── 日本とタイにおける華人の民俗宗教を事例としての比較研究 ──
R A 氏 名	翁（おう）　康（こう）　健（けん）
専攻・研究室・学年	人間科学専攻　社会学研究室　博士後期課程３年
指導教員氏名	櫻　井　義　秀

研究成果の概要

多文化共生社会の実現を志向するにあたって，本研究は，移民とホスト社会の民族の間に境界線が存在する場合と，民族の境界線が乗り越えられている場合とに分けて，移民の民俗宗教のそれぞれが多文化共生社会の創出についてどのような意味を持っているのかを考察することを目的とする。

その方法として，日本とタイにおける華人の民俗宗教を事例とした比較研究を行う。一般に，日本における華人は異民族として区別されているが，一方で，タイにおける華人は本土民族と同じ扱われ方をしており，それぞれ対照的な事例であると言える。

日本での調査対象事例としては，神戸普度勝会（祖先祭祀の儀）という華人の民俗宗教文化を取り上げた。調査の結果，神戸華人は中国人としてのエスニシティだけでなく，神戸人としてコミュニティにも所属している。地縁に基づいて実施される普度勝会は，中国人のエスニシティだけでなく，神戸人コミュニティによってその開催が実現されていたことも言える。

タイの調査事例としては，ゲイ・ビーチョン（厄払いの儀）とギンゼイ（ベジタリアン・フェスティバル）という華人の民俗宗教文化を取り上げた。調査の結果，上記二つの華人宗教儀礼は，華人のエスニシティ，および血縁や地縁を越えて，「宗教文化の消費パッケージ化」や，タイ仏教文化の禁欲的な修養と結びつくことによって，産業化・都市化社会において個人主義化しつつあるタイの宗教儀礼実践へ適応している様子がうかがえた。

日本の事例から示されるように，移民とホスト社会の民族間で境界線が存在する場合，民俗宗教は共同体を通じて実践される。その際，移民はホスト社会と融和的な仕方で自らの共同体を再構築することによって，共生を実現していたのであった。つまり，移民はホスト社会と共生するにあたって，まず共同体に所属する必要があると考えられる。それに対して，タイの事例のように，すでに民族の境界線が乗り越えられているような場合，民俗宗教は個人単位で実践可能な形式をとる。そのため，移民が共同体から離れても，ホスト社会との共生し続けることが可能となっているのだと考えられる。

研究テーマ	ライトノベル研究をめぐる分析枠組みの再構築
R A 氏 名	酒　井　駿太郎（さかい しゅんたろう）
専攻・講座・研究室・学年	人文学専攻　表現文化論講座 映像・現代文化論研究室　博士後期課程 3 年
指導教員氏名	押　野　武　志

研究成果の概要

本研究の目的は，ライトノベルならではの性質に注目した作品分析の枠組みを提出することにある。

主たる先行論（東浩紀のキャラクター小説論）は未完の状態にあるため，その解釈・補完・批判的検討による分析枠組みの再構築を研究計画上の主眼とした。

その結果，先行論は，ライトノベル全体をその特質から論じるものとして，一定の射程は保持しているものの，現代の「生の実存」の負債としての側面，各個人がその半生で行ってきた選択の “責任” を問う点のみを重要視し，正の側面である選択の “成果” について論じていないことが明らかとなった。ジャック・デリダの自己同一性の議論と，生の意味づけに関する議論を下敷きとした先行論の主張には，一定の意義が見出されるものの，補完を行ってなお，不完全な部分が残る。

本研究はその点を踏まえ，ライトノベルの分析枠組みとして，「選択の “成果” を問い，明らかにする実験小説」という視点を採用し，キャラクター論を発展させたジャンル論の立場から，個別作品の分析を行っていくこととした。これは，ライトノベルを「キャラクター小説」── 実際の人間とはかけ離れた類型的な登場人物（キャラクター）を用いて描く小説 ── と捉える点では先行論と一致するが，ネットインフラの発達に伴う，読者共同体の性質変化，個々人の読みの集積可視化を考慮している点で大きな変更が加わっている。キャラクターに関する言及が大量に蓄積された結果，キャラクター論は今やジャンル論へと接続されつつある。キャラクターを「可能性の束」と見なした新城カズマの見立ては，ジャンルを「可能性の束」として取り扱う今現在のライトノベルの文脈に持ち越される。また着目点が “成果” に変わったことで，対象とする“実験的小説”の幅も大きく広がっているのも，先行論と異なる点である。

研究テーマ	**アヘン禁圧運動から見た20世紀初頭の中国財政と中央・地方関係に関する歴史学的研究**
R A 氏 名	坂東（ばんどう） 泰（ゆたか）
専攻・研究室・学年	人文学専攻　東洋史学研究室　博士後期課程２年
指導教員氏名	吉　開　将　人

研究成果の概要

【研究の目的】本研究は，20世紀初頭の清朝が中国国内におけるアヘンの生産・消費を撲滅するとして始めたアヘン禁圧運動の実施に着目する事で，当時の清朝中央政府と省政府の間における財政上の対立が，省政府による運動の実施，並びに省政府による運動の評価付けに如何なる影響を及ぼしたのかを明らかにすることを目的とする。

【研究計画】20世紀初頭当時の中国における主要なアヘン産地だった山西省を例にとり，分析を行う。まず，清朝中央と地方の間でアヘン税収をめぐる対立を引起した土薬統税という制度について，その実施体制を明らかにする。次いで，山西省におけるアヘン禁圧運動の様子を概観する。最後に，運動の進展が土薬統税の徴収に対して如何なる影響を与えたのかを考察する。

【研究成果】中央は土薬統税を実施する事で，地方のアヘン税収を自らに吸収しようとしたが，それにより中央・地方間でアヘン税収をめぐる対立が生じた。アヘン禁圧運動の内実は，アヘンの流通の在り方を変える事であって，アヘンを撲滅させる事ではなかった。運動の進展により，土薬統税の徴収は滞った。土薬統税という形で中央から財政的圧力をかけられていた山西省は，省内のアヘン流通が中央からの干渉を受けなくなる事を，運動の進展として評価したのである。